

◆【海員随想】二つの救命胴衣① 石橋 正

「船長、錨が切れました！ すぐブリッジに上がってください！」

激しくドアがたたかれて大声で叫ぶ声が聞こえ、何人かが慌ただしく船首の方に駆けてゆく足音がした。私はその少し前から、船体の揺れの異常さに気がついて目を覚まし、作業服を着ようとしていたところであった。

昭和25年の晩秋、そこは北海道襟裳岬の東側にある広尾港（現在の十勝港）の港外であった。前日の夕刻、干潮で水深が浅く、入港することができなかったので、翌日の満潮時に入ろうと思い、防波堤の近くに錨泊していた材木船の沖に、予備錨を2個、ワイヤーにつけて双錨泊していた。ベタ凧ぎであったので守錨当直も置かず全員就寝していたのである。しかし、低気圧は急速に発達しながら接近、南東からのウネリが高くなり、風浪も急に強まって、ワイヤーの弱くなっていた所が切断、続いてもう一方も支えきれずにすぐ切れてしまったのであろう。

私はブリッジに駆け上がって周囲の窓を全開し、海の様子を見て、その荒れ方が尋常でないことを知った。

船はまるで糸目を切られた凧のようであった。グラリグラリ、巨大なうねりに揺られ、斜め前方に激しく押し流されてゆく。まだ夜明けには間があり闇夜であった。その闇の中で材木運搬船が、こちらも荒天準備をしていたらしく、煌煌と全作業灯を点じていた。その光芒に照らされ、荒浪が白く崩れながら次々と襲ってくる姿がはっきり見えた。そして、私の船が流されてゆく方向には、激浪のたたきつけている険しい崖があり、あそこにぶつかったら万が一にも助からないと思うと、全身から血の気が引いた。

「大丈夫か！」と、材木船のデッキから大勢の乗組員が本船に向かって叫んでくれていたが、どうすることもできない。

本船には24ボルトのバッテリーで点灯できるデッキ上の灯火は極めて少なく、デッキの様子はよくわからなかったが、飛び出してきた乗組員もどうしてよいかわからず、マスト周りやハッチの角にしがみついていた。ブリッジに入った私も、ただ窓枠にしがみついて、激しく沸き立つ大浪の様子を見ているだけであった。そして「エンジンよ、早くかかってくれ」と祈っていた。